

龍門文庫蔵『浄土三部經』について

——『阿弥陀經』『觀無量壽經』の字音注を中心に——

目次

- 一、『浄土三部經』について
- 二、龍門文庫蔵『浄土三部經』
- 三、『阿弥陀經』『觀無量壽經』の字音注
 - I、訓点の加点は移点によるものか否か
 - (1) 声点
 - (2) 仮名音注
 - II、訓点に反映された漢字音
 - (1) 声点
 - 1 声点の形式
 - 2 一音節去声字の上声化の割合
 - (2) 仮名音注
 - 1 頭音
 - (1) 頭音を「ウー」とする表記
 - (2) 語頭の狭母音の脱落
 - 2 体母音

佐々木

勇

(1) 才段長音の開合

(2) 合拗音

3 尾子音

(1) m 韻尾と n 韻尾

(2) 舌内入声音の表記

4 促音

四、むすび

一、『浄土三部経』について

浄土教諸宗の根本經典である『浄土三部経』とは、『無量壽経』(大経)『觀無量壽経』(觀経)『阿弥陀経』(小経)の三部の經典の総称である。

この三部の經典は、我が国において奈良時代に既に浄土經典中の權威として撰ばれていた⁽¹⁾のであり、早い例では、『正倉院文書』「智識優婆塞等貢進文」に、

葛井連廣往年十八實右京九條三房戸頭葛井連惠文之男

讀経 法華經一部 最勝王經一部

方廣經一部 涅槃經十卷

僧伽吒經一部 彌勒經三卷

佛頂經一卷 阿彌陀經一卷

誦経 理趣經一卷 藥師經一卷

不空羼索陀羅尼 佛頂陀羅尼

龍門文庫蔵『浄土三部経』について

誦論 因明論一卷 百法論并卅唯識

唯識論二卷解文 唱禮具足

天平六年七月廿七日

の如くに記された例が見られる。

『寧樂遺文』『平安遺文』中には、本経を「讀經」「讀誦」の下に記した例が外にも存するが、その読みが音読であったのか訓読であったのかは不明である。この点について知るべく、残存する訓点本を見るに、本経の平安時代の訓点本はいずれも訓読を示しており、漢字の音で通して読んだ資料は、現在のところ鎌倉時代以降のものしか管見に入っていない。現時点で知り得た字音直読資料を鎌倉時代のものに絞って記せば左の如くである。

1 親鸞筆『観無量寿経』『阿弥陀経』建仁く元久頃点。⁽³⁾2 仁和寺蔵『阿弥陀経』鎌倉初期点。⁽⁴⁾3 恵信尼筆仮名書き『無量寿経』鎌倉中期写本。⁽⁵⁾4 出口常順院下蔵『阿弥陀経』鎌倉後期点。⁽⁶⁾

5 龍門文庫蔵『浄土三部経』鎌倉後期点。

以下、時代が降るとともに、残存する音読資料は多くなる。⁽⁷⁾

この事實は、『浄土三部経』の誦論が、法華経の場合と同様に、古くは訓読のみで行なわれ、後に音読が起こったことを示しているのではあるまいか。⁽⁸⁾尚、『浄土三部経』の音読資料が見出される鎌倉時代以降も、その訓読が滅んだ訳ではないことは、後伏見院宸翰と伝えられる『仮名書き観無量寿経』が知恩院に現存し、江戸時代に至ってその模刻版本が『阿弥陀経』と共に出版されていることの一点をもつても知ることができる。⁽⁹⁾この点についても法華経誦論の歴史と一致するのである。

二、龍門文庫蔵『浄土三部経』

龍門文庫蔵『浄土三部経』は、川瀬一馬博士『日本書誌学之研究』（昭和18年6月。講談社。）に、一部写真と共に初めて紹介された。以下その記述を参照しつつ書誌的事柄について略述する。

本文は、鎌倉中期の版本であり、『無量寿経』巻上・『無量寿経』巻下・『観無量寿経』・『阿弥陀経』の四帖を完存する。『浄土三部経』の総てを備えた版本としては、最古のものの中の一つである。⁽¹⁰⁾この四帖は、本来卷子本であったものを江戸時代初期頃に折本に改めたものらしい。

四帖ともに、每半折の大きさは、縦26.8cm横8.2cmである。全巻に金界を施し、上下欄を金銀切箔砂子により裝飾する。界高22.2cm・界幅2.0〜2.2cm。折本の表紙には後筆の外題（A「佛説阿弥陀経」B「観無量寿経」C「無量寿経巻上」D「佛説無量寿経巻下」。以下、各帖をA・B・C・Dで記すことがある。）の外に、A・B・Dには「興福院」、Cには「光心」の文字が見られる。「興福院」の文字は、Cの表紙見返にも存し、Bの奥書には、「興福院光心大姉」と記されている。この興福院は、現在奈良市佐保川西町の浄土宗の尼院であり、光心は、興福院の江戸時代初期の住持であつて、当時の本経の所持者であつたと見られる。⁽¹¹⁾

この龍門文庫蔵本には、極めて詳しい訓点が付点されており、重要な国語史料となり得る。その加点的様子は、次の如くである。

B『観無量寿経』の冒頭部分

佛^{フツ}・説^{セチクワンム}観^{リヤウシユ}・無^{キヤウ}量^ノ・寿^ノ・經^ノ。宋^{ソウノク}元^{エン}・嘉^カ中^{チュウ}・叡^ウ良^{リヤウ}耶^ヤ舍^{シャ}譯^{ヤク}。

如^{ニヨ}是^セ・我^カ・聞^{モン}・一^{イチ}・時^{シフツ}佛^{フツ}・在^{サイ}・王^ウ舍^{シャ}・城^{シヤウ}・耆^キ闍^{シャク}崛^{クセン}山^{セン}・中^{チュウ}・與^ヨ

大^{ダイ}・比^ヒ・丘^ク衆^{シュ}・千^{セン}二^ニ百^{ヒヤク}五^ゴ・十^{ジュウ}・人^{ニン}・俱^ク・菩^ホ薩^{サツ}三^{サン}万^{マン}二^ニ千^{ニヤウ}。

龍門文庫蔵『浄土三部経』について

文^{モン}・殊^{シュ}師^シ利^リ法^{ホフ}王^{ワウ}子^シ・而^ニ爲^キ上^{シヤウ}・首^{シユ}・余^ニ・時^{シフ}王^{ワウ}舍^{シヤク}大^{ダイ}・城^{シヨウ}・^マ

本経は、右と同様な状態で四帖の全体約1,600行に亘って加点されているのである。⁽¹²⁾

ただし、その加点は一時に成されたものではなく、次の七次に亘っているものと見られる。

①第一次朱点——四帖全体の声点と句切点であり、②第一次墨点の下になる箇所が見られるため、本経に最初に加点された訓点であることが知られる。鎌倉中期〜後期点。

②第一次墨点——A『阿弥陀経』の92行目までの仮名音注であり、仮名字体により鎌倉後期頃の訓点と判断される。

③第二次朱点——四帖全体に亘り、①第一次朱点に重ねて加点している濃い朱点である。②第一次墨点の上、④第二次墨点よりは下になる部分が存する。鎌倉後期頃点。

④第二次墨点——A『阿弥陀経』93行目以降と、B『観無量寿経』との仮名音注であり、仮名字体はやはり鎌倉後期頃のものであろうと思われる。

⑤第三次墨点——C『無量寿経』巻上・D『無量寿経』巻下の二帖全体に見られる仮名音注である。仮名字体より、加点の時期は室町時代に降るものと思われる。

⑥第三次朱点——⑤と同様、C・Dの二帖にのみ存する仮名音注である。室町時代加点。

⑦第四次墨点——四帖全体中に希に見られる薄墨の仮名音注である。加点は、江戸時代にまで降るかと思われる。

これによって知られる通り、C『無量寿経』巻上・D『無量寿経』巻下の二帖に対する仮名音注の加点時期は室町時代であり、他の二帖よりも遅れている。その理由については詳かではないが、鎌倉時代において『無量寿経』を読誦することが一般的ではなかったのかも知れない。⁽¹³⁾

その『無量寿経』上・下二帖に対する加点は、加点時期が降るのみならず、仮名音注の内容にも『阿弥陀経』『観無量寿経』と相違が見られる。その若干例を左に記す。

(i) 連声を盛んに表記する。(用例の声点は省略する。以下同じ。)

面王^{メンナウワンシヤ}尊者^{シヤ} (C 11)⁽¹⁴⁾ 信慧^{シンズエ}菩薩^{ホササ} (C 15)

根悅^{コンズエツク}豫^コ (C 75)

(ii) m・n の韻尾を区別しない。

爲男^{ウナナムキニヨ}爲女^{ニヨ} (C 47) 願慧^{クワンズエ}菩薩^{ホササ} (C 17)

〔男〕は m 韻尾、「願」は n 韻尾であるが、下位字は共にナ行者で連声している。他の m 韻尾に続く連声も同様にナ行音である。

右の様な点で、『無量寿経』上下二帖は、『阿弥陀経』『観無量寿経』の二帖とは異なる。よって、『無量寿経』上下二帖は、室町時代における連声の実態などを知る資料としては貴重であるが、他の二帖とは区別して考察を行なう必要がある。そこで本稿では、鎌倉時代加点の仮名音注を有する A 『阿弥陀経』 B 『観無量寿経』の二帖についての分析を行なうことに目的を絞りたい。そして、以下、A 『阿弥陀経』 B 『観無量寿経』の二帖を、本資料と呼ぶこととする。

三、『阿弥陀経』『観無量寿経』の字音注

I、訓点の加点は移点によるものか否か

〔1〕声点

本資料の声点加点例中には、次の如き例が存する。

a 無量^{ムリヤウ}・幢佛^{トウフツ} (A 76) b 想^{サウ}・成^{シヤウ} (B 102)

c 珊^{サン}・瑚^コ (B 115)

a・b の例は、非入声・非濁音である「量」「想」の両字に対して、入声濁の声点が加点されているものである。この二

例は、それぞれ直後の「幢」「成」に本来加點されるべき去声点が、直上にずれて生じたものと思われる。⁽¹⁵⁾また、cの例は、句切点の直後の「珊」に、上位字の影響によつて濁することを示す新濁の声点「・」が加點された例である。これは、下字「潮」の上声新濁点が一文字分上にずれたものと解される。⁽¹⁶⁾

これらの声点加點上の誤りは、読誦しつゝ加點される際には起こり得ないとは言ひ切れないが、親本からの移点による誤りと考えるのが穩当であろう。

(2) 仮名音注

本資料の仮名音注の加點には、一旦書寫した文字を擦り消し、その上に重ねて記した部分が見られる。

眷屬圍遶クエンソクノキマホ(B 35) △ソク」は、直前の字「眷」の読みである「クエン」を擦り消した上に書き、「ウキ」も同様に「ソ

ク」を擦り消した上に記したものである。▽

深法シムボウ(B 36) △シム」は、直後の字「法」の読みである「ホウ」を擦り消した上に記したものである。▽

擦り消されている仮名は外にも存するが、総て本文の墨点と同筆であり、訓点加點の途中の誤りを訂した例と判断される。この様な訓点加點の際の誤りは、移点に依らずともしばしば見られるが、右の様に一字分ずつれた音を注することは、さ程起こらないのではなからうか。また、本資料中には、親本からの移点の際に仮名字形の類似により誤写したと考えられる例が散見するのであり、声点同様、仮名音注も移点にかかるものと思われる。⁽¹⁷⁾

II、訓点に反映された漢字音

本節では、訓点により知られる漢字音について考察を加え、併せて、祖本の成立時期と系統について考えてみたい。

(I) 声点

1 声点の形式

本資料の声点の形式は、次の通りである。



右の点図中、一番上の壺の毘富羅声と第二の壺のフ入声は、実際の加點例はそれぞれ一例ずつであるから、本資料は、⁽¹⁸⁾ほぼ四声体系であると言える。

さて、平安鎌倉時代の呉音の声点体系については、沼本克明博士が多くの資料の分類に基づき考察をされている。⁽¹⁹⁾今、これに少々の資料を加え、分類の観点を變えて把握し直してみたい。その際に拠所となる資料を次に掲げる。⁽²⁰⁾

(a) 呉音直読資料

- ① 大般若経平安後期点 (慈光寺・東京国立博物館・国立国会図書館・大東急記念文庫に分蔵)
- ② 仏説六字神呪王経天喜・保安点 (石山寺)
- ③ 四種相違疏文仁安三年点 (書陵部)
- ④ 妙法蓮華経院政期点 (西教寺)
- ⑤ 仏説觀弥勒菩薩上生兜率陀天経院政期点 (高山寺)
- ⑥ 大般若経院政期点 (金剛輪寺)
- ⑦ 佛説一切如来金剛寿命陀羅尼経院政期点 (京都女子大学)
- ⑧ 妙法蓮華経院政末期点 (聖衆来迎寺)
- ⑨ 阿弥陀経・觀無量寿経鎌倉極初期点 (西本願寺)
- ⑩ 円覚経卷上嘉禄二年点 (高山寺)
- ⑪ 大方広華嚴経寛喜元年点 (高山寺)
- ⑫ (同) 寛喜二年点 (東寺)
- ⑬ 妙法蓮華経鎌倉初期点 (某氏)
- ⑭ 金光明最勝王経鎌倉初期点 (高山寺)
- ⑮ 大般若経鎌倉初期点 (高知安田八幡宮)
- ⑯ (同) 建長六年頃点 (東京大学国語研究室・大東急記念文庫に分蔵)
- ⑰ (同) 建長六年頃点 (山梨県法善寺)
- ⑱ 仏説六字神呪王経文永六年頃点 (東寺)
- ⑲ 妙法蓮華経鎌倉中期点 卷七・八 (大東急記念文庫)
- ⑳ (同) 卷五 (大東急記念文庫)
- ㉑ (同) 鎌倉中期墨点卷一 (国立国会図書館)
- ㉒ (同) 鎌倉中期墨点卷二 (国立国会図書館)
- ㉓ (同) 鎌倉中期朱点卷一・卷七 (国立国会図書館)
- ㉔ 成唯識論鎌倉中期点 (大東急記念文庫)

- 庫) ②仁王護国般若波羅蜜多經鎌倉中期点(真福寺) ②6大方広仏華嚴經正安二・三年点(高山寺) ②7(同) 正安四年・乾元二年・嘉元元年点(高山寺) ②8(同) 嘉元二年点(高山寺) ②9中論偈頌鎌倉後期点(東大寺図書館) ③0(同) 鎌倉後期点(弘文莊) ③1成唯識論鎌倉後期点(国立国会図書館) ③2(同) 鎌倉後期点(天理図書館) ③3仏説六字神呪王經鎌倉後期点(真福寺) ③4妙法蓮華經永和三年頃点(京都大学図書館) ③5(同) 南北朝期点(大東急記念文庫25ノ44ノ1048) ③6(同) 南北朝期点(大東急記念文庫25ノ43ノ1047) ③7(同) 南北朝期点(京都国立博物館) ③8(同) 南北朝期点(東大寺図書館)
- (b) 音義・字書資料

- (1) 金光明最勝王經音義承暦三年抄本(大東急記念文庫) (2) 図書寮本類聚名義抄和音注・呉音注 (3) 大般若經字抄長寛二年写本 (4) 法華經单字保延二年写本 (5) 九条本法華經音鎌倉初期写本 (6) 新訳華嚴經音義安貞二年写本 (7) 貞元華嚴經音義安貞二年写本 (8) 大般若經音義鎌倉初期写本 (9) 観智院本類聚名義抄和音注・呉音注 (10) 大般若經音義弘安九年写本 (11) 最勝王經音義正平七年写本和音注・呉音注(天理図書館)

右の資料群を、「声点による清濁表示の方法」という観点から分類するならば、以下の如くに分けることが可能となる。

(一) 清濁を区別しないもの

①(1)

(二) 清濁を区別するもの

I 清と濁との二種を区別するもの

a 四声のみを区別するもの

- ② ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲

b 四声の外に昆富羅声またはフ入声を区別するもの

(ナシ)

II 清（・）本濁（・）新濁（・）の三種を区別するもの

a 四声のみを区別するもの

⑬

b 四声の外にフ入声を区別するもの

⑭

c 四声の外に毘富羅声・フ入声の両方を区別するもの

⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
㉖
㉗
㉘
㉙
㉚
㉛
㉜
㉝
㉞
㉟
㊱
㊲
㊳
㊴
㊵
㊶
㊷
㊸
㊹
㊺

III 清（・）本濁（・）新濁（・）などを区別するもの

①
②
③
④
⑤

この分類によつて、吳音資料で清濁を区別するようになるのは、平安時代後期からであることが確認される。平安後期以降、清濁を区別する資料の中で、I 清と濁との二種を区別するものは、点数が多く、清濁を区別する資料の中で最も一般的な声点形式であると言えよう。ただし、清濁二種を区別する声点形式では、声調は四声だけしか区別しておらず、毘富羅声・フ入声を区別する資料は一点も存しないことは注目される。

時代が降り、院政時代に入ると、清濁の濁の内に、「本濁」と「新濁」とを区別する資料が現われる（II・III）。そして、その中で毘富羅声・フ入声が生まれて来たものと解される。尚、この形式の中のII c は法相宗で起こり、III は院政期の天台宗山門派で使用されたことが既に指摘されており、今回分類した資料群もそれを裏付ける。⁽²¹⁾

ここで、龍門文庫蔵『阿弥陀経』『観無量寿経』の声点形式に視点をもちすと、本資料の声点形式は、全体的には右の分類のII a に属しながらも、毘富羅声・フ入声も見られたことから、II c の段階への過渡的状況にある形式であると捉えることが可能である。これによつて即ち、本資料の親本は、法相宗の流れを汲む加点本ではなかつたかと思われてく

るのである。

2 一音節去声字の上声化の割合

次に、本資料の声調体系が、いつ頃の呉音声調を反映するものであるかを知るために、「一音節去声字の上声化」の割合を調査してみる。この現象は、鎌倉時代に入り顕著となり、鎌倉中期にはほぼ完了するものである。⁽²²⁾ 調査の結果、比較のための資料中に、本資料は、表Iのように位置づけられる。(調査は、句頭の例に限った。)

表I

資料 声調	東	龍	親	聖
	7例	57例	109例	81例
去声	37例	20例	6例	4例
上声				

聖—聖衆来迎寺藏『妙法蓮華經』院政末期⁽²³⁾点
 親—親鸞筆『阿弥陀経』『観無量寿経』^(二〇一三〇六)建仁元久頃点
 龍—龍門文庫藏『阿弥陀経』『観無量寿経』(本資料)
 東—東京大学国語研究室藏『大般若波羅蜜多経』卷一建長六年頃点^(二三四)

これによると、本資料の上声化の割合は、鎌倉極初期の親鸞の資料よりは高く、鎌倉中期の『大般若経』よりは低いのであって、鎌倉初期の声調体系を反映しているように見られる。すなわち、本資料の声点加點時期は鎌倉中期から後期であったと思われるものの、その親本の声点は、鎌倉初期頃のものではなかったかと思われるのである。

(2) 仮名音注

1 頭音

(1) 頭音を「ウー」とする表記

① エ列音

本資料の字音仮名表記には、同一字に複数の形が見られる場合がある。ここに取り上げる、頭音の字音仮名遣が「エ」または「エ」の字の場合も、その一つである。

a 字音仮名遣で頭音「エ」の字（〈 〉内の数字は用例数。以下同。）

エ表記——幽^ウ〈2〉映^{エイ}〈1〉葉^{エフ}〈6〉閻^{エム}〈4〉延^{エイ}〈1〉演^{エン}〈9〉衣^{エイ}〈1〉要^{エイ}〈1〉遙^{エイ}〈4〉縁^{エン}〈4〉

エ表記——幽^ウ〈1〉映^{エイ}〈5〉葉^{エフ}〈8〉閻^{エム}〈2〉揺^{エイ}〈1〉焰^{エン}〈3〉

b 字音仮名遣で頭音「エ」の字

エ表記——（ナシ）

エ表記——圓^{エン}〈6〉廻^{エイ}〈5〉畫^エ〈1〉悦^{エフ}〈1〉慧^{エイ}〈2〉衛^{エイ}〈1〉

ウエ表記——圓^{ウエン}〈1〉廻^{ウエイ}〈1〉畫^{ウエ}〈3〉婉^{ウエン}〈1〉會^{ウエイ}〈1〉駕^{ウエン}〈1〉

ウエ表記——婉^{ウエン}〈1〉

a 頭音の字音仮名遣エの字には、同一漢字であつてもエ・エの両表記が見られ、当時の国語におけるア行・ヤ行のエとワ行のエとの発音上の区別が、失われつつあることを伺わしめる。

一方、b 頭音の仮名遣エの字は、エあるいはウエ・ウエの表記が採られ、漢字原音の合口性を表わそうとする努力が看取される。また、そのためにウエの如き表記が採られることは、当時の国語の音韻変化によつて、ワ行のエの合口性が薄れていたことを示すものであろう。これによつて、和語あるいは口頭語では、ueの音節が失われつつあつた時点でも、漢字音による経文読誦の場では、それを音韻として区別しようとしていたことが知られる。

② イ列音

① エ列音と同様に用例を掲げる。

a 字音仮名遣で頭音「イ」の字

イ表記——一^イ〈66〉以^イ〈47〉印^イ〈1〉因^イ〈9〉夷^イ〈1〉已^イ〈39〉引^イ〈1〉意^イ〈7〉異^イ〈8〉逸^イ〈1〉
ウヰ表記——移^{ウヰ}〈1〉

b 字音仮名遣で頭音「キ」の字

イ表記——章^イ〈3〉

ヰ表記——章^ヰ〈27〉圍^ヰ〈2〉威^ヰ〈3〉爲^ヰ〈87〉位^ヰ〈1〉慰^ヰ〈3〉謂^ヰ〈1〉

ウヰ表記——圍^{ウヰ}〈1〉威^{ウヰ}〈1〉爲^{ウヰ}〈1〉

右によつて知られる通り、この場合にもウヰの表記が見られ、当時の国語において、ワ行のヰの合口性が失われかけているものと解釈される。ただし、異例は存するものの、字音仮名遣に対応した表記が、①エ列音と較べて多数であることは、/ue/の消滅よりも/uɪ/の消滅の方が遅れたことを示すものである。

③オ列音

頭音オ・ヲの漢字には、本資料中にウオ・ウヲの如き表記例は存しない。先と同様に表記例を掲げれば次の通りである。

a 字音仮名遣で頭音「オ」の字

オ表記——億^オ〈2〉憶^オ〈1〉音^{オム・オン}〈7〉於^オ〈54〉

ヲ表記——億^ヲ〈28〉憶^ヲ〈1〉音^{ヲム・ヲン}〈34〉應^ヲ〈18〉鷹^ヲ〈1〉

b 字音仮名遣で頭音「ヲ」の字

オ表記——(ナシ)

ヲ表記——園^ヲ〈1〉洄^ヲ〈1〉遠^ヲ〈2〉飲^ヲ〈1〉

全体として「ヲ」の表記例が多いのは、当時、仮名としての「ヲ」が、「オ」よりも優勢となっていたためであらうが、⁽²⁶⁾

本資料の仮名表記と字音仮名遣との対応は、認め難いのである。よつて、本資料は、語頭のオとヲとの発音上の区別が失われたとされる11世紀以降の音を反映していることは明らかである。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾

以上、イ列音では基本的に古用に適い、エ列音でも字音仮名遣エの字は原音に対応している本資料の仮名音注は、日本漢字音史における鎌倉時代初期頃の様相と一致する。⁽²⁹⁾

(2) 語頭の狭母音の脱落

本資料の仮名音注には、「一」の字に「チ」とだけ注し、頭音〔i〕を記さない例が見られる。

一^チ一^チ (B 93 94 102 111 117 118 133 134)

一^チ一^チ (B 58 94 97 112 116 128 132 140) 一^チ一^チ (B 122 130 242) 一^チ一^チ (B 241 242)

右の如く「一」という語の上字の場合であり、他語の場合には省略されることがない(「一時」「一切」など)。また、「一一」という同一語内でも「イチイチ」と「チイチ」との両様が存し、「チイチ」の表記は、語頭の狭母音〔i〕が脱落した場合の音を記し留めた音声的な表記であると解釈される。

語頭の狭母音の脱落については、和語では、「パウ(養)」「ダス(出)」などの例が、平安中期の角筆文献に指摘され、毛筆による文献でも平安後期の例が知られているが、本資料の如き字音直読資料の字音語に類例を指摘できることは重要であろうと思われる。

2 体母音

(1) 才段長音の開合

本資料の仮名表記の内、特に注目すべき問題として、才段長音の表記が有る。

① 連母音の長音化

本資料には、

龍門文庫蔵「浄土三部經」について

〔au〕^{ミヤル}名爲正觀 (B 254)
 〔ou〕^{カイヤ}皆應一觀之 (B 174) 是故應當 (B 183)
 の如き例が存し、〔au〕の連母音は、共に長音化していたことが知られるのである。⁽³¹⁾

② 才段長音の開合の表記

更に、本資料には、au から転じた開長音〔ɔ:〕と、〔ou〕から転じた合長音〔o:〕との表記を混同している例が存するのである。

- 〔ɔ:〕^{ニシワシキタイ}余時王舍大城 (B 4) 〔城〕^{シヤウ}〈1例〉
 淨業正因 (B 69) 〔淨〕^{シヤウ}〈18例〉
 生死之罪 (B 411) 生諸佛前 (B 427) 生此惡子^{シヤウシ}へやはヨ擦り消しの上^{シヤウ} (B 42) 〔生〕^{シヤウ}〈124例〉
 如此行者 (B 360) 〔行〕^{キヤウ}〈37例〉
 无量寶蓋 (B 126) 〔量〕^{リヤウ}〈50例〉
 食麩飲漿^{シキセウブムシヤウ}へやはヨ擦り消しの上^{シヤウ} (B 9) 〔漿〕^{シヤウ}〈2例〉
 乘寶蓮華 (B 102) 〔乘〕^{シヨウ}〈8例〉
 頂上毗楞伽 (B 233) 〔楞〕^{リョウ}〈3例〉

才段長音の開合の別は、室町時代末までは一般には保たれていたと説かれている。ただし、その中であつて、混同例は平安時代から既に指摘されている。本資料の例を含めたそのような早期の例を、いかに解すべきかは決定しかねるが、平安・鎌倉時代の混同例として報告されているものの大部分が、漢字音の例である点は重要であろう。即ち、漢字音は、当初から学習すべき音であつたのであり、拗音の発音は、その中でも習得困難な音の代表的なものであつたと思われる。

それ故、拗長音化した〔jɔ:〕と〔jo:〕との音の違いは区別できても、当該漢字の音が〔jɔ:〕であるのか〔jo:〕であるのかの認識が難しく、表記の混同となつて表われたのではないかと考えられる。また、その際、「一ヤウ」の字音仮名遣の字の仮名表記を「一ヨウ」とする例の方が古くから見出せることは、この混同を起ささせる力が、〔jɔ:〕↓〔jo:〕という発音努力の少ない方向により強く働いたことを示しているであろう。

また、本資料の才段長音の開合の表記が、底本の表記をそのままに伝えるものか否かが問題となる。この点については不明とせざるを得ないが、開音の字に対し一旦「シヨウ」としながら、「ヨ」を擦り消した上に「ヤ」を記して古用に適う仮名遣に訂している二例については、誤写の多い現存本の加点者が、鎌倉後期の移点の際に底本を良く見ず、自分の発音に従つて加点した後、写し誤りに気づいて訂した例と見ることができよう。

(2) 合拗音

本資料の合拗音の表記は、よく古用に適っており、直音表記例は、「逆^{キヤク}」と「況^{キョウ}」と「況^{クキヤク}」(「況^{クキヤク}」)のみである。ただし、この内「逆」字は、「観音院本類聚名義抄和音」でも「禾^{キヤク}」(佛上59―4)、高山寺藏『金光明最勝王經』鎌倉初期点でも「逆^{キヤク}前^{キヤク}来」(巻十)と表記されるのであつて、本資料の仮名音注が鎌倉初期頃の漢字音を反映するものであろうというこれまでの考察と矛盾しない。

3 尾子音

(1) m 韻尾と n 韻尾

鎌倉時代に大きな変化を見せる現象の一つである m 韻尾と n 韻尾との表記について調査してみる。

① m 韻尾字

a ム表記―26 字 284 例

龍門文庫藏『浄土三部經』について

三〈46〉今〈17〉凡〈3〉南〈1〉含〈1〉品〈15〉嚴〈9〉尋〈2〉心〈44〉念〈33〉慙〈1〉懺〈1〉林〈1〉
 梵〈5〉深〈8〉焰〈3〉犯〈2〉甚〈6〉男〈6〉禁〈1〉臨〈3〉貪〈1〉金〈33〉閻〈6〉音〈26〉飲〈1〉
 b ン表記—17字60例

三〈10〉今〈3〉凡〈1〉劔〈3〉品〈3〉嚴〈1〉尋〈1〉心〈2〉念〈7〉慙〈1〉懺〈1〉林〈1〉梵〈1〉
 甚〈1〉男〈2〉金〈9〉音〈13〉

c 無表記—1字2例

音〈2〉

② n 韻尾字

a ン表記—128字1066例

万〈11〉乾〈1〉乱〈1〉云〈6〉人〈39〉仁〈1〉伴〈1〉但〈10〉便〈5〉信〈14〉元〈1〉先〈4〉典〈4〉
 冠〈4〉分〈18〉前〈19〉勸〈2〉千〈34〉半〈1〉印〈1〉問〈3〉善〈29〉嘆〈3〉因〈9〉園〈1〉圓〈7〉
 團〈1〉堅〈1〉塵〈1〉天〈26〉婉〈2〉存〈1〉安〈2〉官〈1〉宣〈2〉專〈2〉尊〈30〉山〈11〉幡〈1〉
 幻〈1〉延〈1〉引〈1〉彈〈1〉徧〈4〉忍〈6〉(以下83字略。)

b ム表記—5字5例

信〈1〉然〈1〉煩〈1〉見〈1〉進〈1〉

c 無表記—7字10例

万〈2〉先〈1〉千〈2〉善〈2〉本〈1〉言〈1〉身〈1〉

漢字音のm韻尾とn韻尾との表記は、平安後期末にm・m・nで定着した⁽³³⁾ものの、鎌倉時代に入り、表記の混同例が急増する。ただし、その表記混同の割合は各資料間で相違するため、混同の割合によってどの時代の加點資料であ

るかを確定することは難しい。とは言え、鎌倉中期の古文孝経仁治三年点(二四二)では全く区別の見られないことが指摘されていること(34)から、本資料は、鎌倉初期頃の実態を反映しているものと考えられよう。

(2) 舌内入声音の表記

本資料の舌内入声音の表記は、チ表記が圧倒的に多く、その中にツ表記を交えるものである。

a チ表記

先行母音

[a] 八・曰・月・脱・薩・跋・達

[i] 一・七・失・室・實・必・悉・日・疾・蜜・逸

[u] (ナシ)

[e] 列・別・劣・徹・悦・滅・潔・結・絶・缺・舌・説

[o] 發・勿・弗・没・物

b ツ表記

先行母音

[a] (ナシ)

[i] (ナシ)

[u] 佛・出・屈・術

[e] (ナシ)

[o] 發

鎌倉時代に入ると、舌内入声音の表記は、「ツ」が一般的となり、それが促音の表記にも受け継がれて行くのであって、鎌倉時代の加点にも拘らず多数のチ表記を見せる本資料の舌内入声音表記は、一般的なものとは言えない。

ここで、鎌倉時代にあつて本資料と同様な舌内入声音の表記を見せる資料として、東京大学国語研究室・大東急記念

文庫分蔵『大般若波羅蜜多經』(二五四)建長六年頃点を挙げることができる。その舌内入声音の表記の実態を先と同様に記せば、次の通りである。(調査は巻一〜巻十へただし巻二は欠◇に限った。)

a チ表記

先行母音

- [a] 曰ワチ・脱ダチ・達ダチ・滑クワチ・末マチ・奪ダチ・察サチ・般ハチ・渴カチ・鉢ハチ・拔ハチ・斂サチ・抹マチ
- [i] 失シチ・悉シチ・日ヒチ・疾シチ・逸イチ・苾ヒチ・膝シチ・畢ヒチ・律リチ

[u] (ナシ)

- [e] 劣ワチ・悅ワチ・結ケチ・缺クエチ・烈リチ・熱ネチ・涅ネチ・設セチ・絶セチ・刹セチ・節セチ・斂サチ・滅メチ・雪セチ・決ケチ・舌セチ

[o] (ナシ)

b ツ表記

先行母音

- [a] (ナシ)
- [i] (ナシ)

[u] 屈クツ

[e] 結ケツ

- [o] 發ハツ・勿ムツ・沒メツ・物モノ・忽コツ・

- 歎コツ・骨コツ・越コツ・

先行母音[u]の場合の表記例が「屈」字のみではあるが、大部分がチ表記であり、しかも、先行母音[u]と[o]の場合にツ表記が見られる点で、本資料と一致する。ただし、この資料では、先行母音[o]の場合には必ずツ表記となり、さらに[e]に続く例でもツ表記が存する点から、龍門文庫蔵『阿弥陀經』『觀無量壽經』よりも、チからツへの移行が進んでいると言える。

尚、鎌倉時代に入っても、舌内入声を主にチ表記する資料として、外に「法華経音義」⁽³⁵⁾と親鸞遺文⁽³⁶⁾とが知られている。そこで、この二つについて検討を加えておく。

まず、「法華経音義」について触れる。東京大学国語研究蔵『法華経音義』(明覚三藏流)を例に挙げるならば、この音義は、室町時代の写しでありながら、九条本『法華経音』の流れを受け「津字」と「知字」とを分け、「津字」「知字」には九条本と同様の字を掲げているのである。しかし、卷音義の『法華経单字』・心空『法華経音訓』の仮名表記には、先行母音[u]の場合はもちろん、[a] [i] [e]の場合にもツ表記例が見られるのであって、実際の運用の場では、鎌倉時代に既に、本資料よりはツ表記例が多かったものと考えられる。⁽³⁷⁾

次に、「親鸞遺文」について見る。親鸞は、徹底した舌内入声チ表記の中で、先行母音[u]の漢字についてはツ表記を採ることが有るが、「佛」の字については、実に多数の付音例の総てを「フチ」として一例の例外もないのである。この点については、龍門文庫蔵『阿弥陀経』『観無量寿経』が、250例の仮名表記の総てを「フツ」とするのは対照的であり、親鸞遺文と本資料との直接の関係は否定されそうである。

以上、本資料の舌内入声音の表記に類似する同時代の資料として、一、『大般若波羅蜜多経』建長六年頃点(法相宗関係)・二、『法華経音義』(ただし明覚流のもの。天台宗山門派)・三、親鸞遺文(浄土真宗)を取り上げたが、本資料は、法相宗関係であると推測されている『大般若波羅蜜多経』⁽³⁸⁾建長六年頃点に最も近いと思われるのであり、先の声点の形式、並びに次項の促音の仮名表記法から導かれる所と一致するのである。

4 促音

本資料には、舌内入声音の中心的表記であるチ表記が、他の入声音の表記にも用いられているように見られる例が、多数存する。その具体例を韻尾別に次掲する。(声点略)

a 唇内入声 (一p)

劫初 (B 23) 十方 (A 44 B 49 50 52 127 170 213 264 267 293 316 332) 十小劫 (B 388) 十劫 (A 47) 十觀 (B 248) 合者 (B 199 199) 合掌 (B 10 325 330 353 365 379) 接足 (B 153) 攝取 (B 214) 攝諸 (B 218) 業障 (B 250 427) 業處 (B 48) 法子 (B 323 338) 給狐獨圍 (A 2) 雜色 (A 30 91 B 133) 雜觀 (B 174 298)

b 喉内入声 (k)

亦遣 (B 13) 亦見 (B 217) 億劫 (B 107 145 201 380) 億劫 (B 411) 億劫 (B 397) 八十億光明 (B 239) 六觀 (B 144 417) 六劫 (B 400) 北方 (A 80) 即見 (B 215 223 260 383 419) 即開 (B 326) 即遣 (B 381) 得見 (B 33 80 154 159 223 259 419 428) 得開 (B 186) 樂器 (B 99 100 141) 極樂國 (B 187 320 335 359) 欲觀 (B 156 249) 白光 (A 22) 白鶴 (A 31) 目捷連 (A 4 B 11 12 36 43) 肉髻 (B 229 247 253 265 265) 若見 (B 107 145) 薄拘羅 (A 7) 赤光 (A 22) 青色青光 (A 22)

右例によつて、これらのチ表記例は、当該入声音に日本呉音における清音が続く場合に出現することが知られる。さらに、各入声音の他の仮名表記との関係を見ると、それぞれ表II・表IIIのようになる。

表IIから、チ表記は、無声子音が下接する場合の表記であり、フ表記・ウ表記は、有声音が続く時の表記であるといふ相補分布を見て取ることができる。また、表IIIでは、チ表記は、カ行子音が下接する場合に見られ、ク表記・キ表記は、他の音の前に出現することが知られる。さらに、両表によれば、チ表記は語末には決して現われないのであつて、唇内入声・喉内入声の音が、促音化していることを示しているものと判断されるのである。

先にも触れた通り、鎌倉時代になると片仮名文や漢文訓読資料・辞書などの舌内入声音表記は、ツ表記が主流となり、それに伴い、舌内入声音と同一のものとして把握されていた唇内・喉内入声の促音も、ツ表記されることが多くなつて行く。ところが、本資料は舌内入声音を主にチ表記するため、促音もチ表記されたと考えられる。(40)

表II —— a唇内入声 ——

無	ウ	フ	チ	表記 下接
1		1	5	カ行
			22	サ
				タ
			12	ハ
				ガ
	2	4		ザ
	3	2		ダ
	1	1		バ
	1	4		ア
	2	3		ナ
		3		マ
		3		ヤ
	1			ラ
		12		ワ
1	32	85		語末
2	42	118	39	計

(表中の数字は用例数。空欄は用例無し。次表も同じ。)

表III —— b喉内入声 ——

無	キ	ク	チ	表記 下接
1	2	1	54	カ行
	9	50	1	サ
	6	28		タ
		17	1	ハ
		23		ガ
	2	18		ザ
		39		ダ
		12		バ
		47		ア
		11		ナ
		13		マ
		3		ヤ
		38		ラ
		15		ワ
	56	190		語末
1	75	505	56	計

ここで、当代における字音直読資料の内に、本資料と同様に促音のチ表記を見せる資料を探せば、やはり先引の『大般若波羅蜜多經』建長六年頃点が浮かび上がる。この文献における促音表記の様子は、左記の如くである。(巻十までの例に限る。)

a唇内入声 (-p)

チ表記

雑色（一巻行169） 雑華（十52） 十方（二120三14） 十遍（三37225四95197268306397五44262六254255七31207354456八24259九483十130） 十想（三47） 及諸（二267302311338358374382409429444453九420） 及彼（八152九462） 入出（三45ハ5） 入初（七329335340365372381393ハ616）
 集智（三51） 集諦（三359） 習氣（三86四106213219224429562）

ツ表記

業障（二104三122） 法性（二118三309四118八205九429430） 法性（四202265304374五32六173七14190349401451ハ37247九478十103221） 法處（五136136397399400401401403403405405七146） 法智（三52） 法界（三138174308四77202265304338374五1132143432432六172174七14124125190268349401451ハ37192204247九478十103221） 法界（四466五144144433434435436437六176176178178180180180七126127127128129130132132133152192268269369ハ249） 法空（三173174四88200264五3022416157186450ハ36203244九477十3396219） 法空（四302370七10347400）

b 喉内入声 (-k)

チ表記

各各（一227233293296365368435438十256275295315335355375375395415435455475495515） 亦各（一291362433） 若起（ハ154） 劇苦（九126）

ツ表記

獨居（一93） 獨覺（二105） 獨覺（三8998211237310四99313六440） 欲界（一212五23七338370420464ハ339） 得空（三173四89115121201264302370五3022416157186450ハ36203244九477十3496220） 極喜（三228） 極喜（四96205406五49288289290六319319七38217217458ハ40212266266） 極喜（六322） 極光（二230三402四12281七104ハ316十202） 北俱盧洲（二226） 北方（一322365十265301321401）

右例の如く、当資料では、チ表記の外にツ表記も見られる点が、龍門文庫蔵『阿弥陀經』『觀無量壽經』とは異なるが、

チ表記・ツ表記共に無声子音が続く場合に見られる点と、決して語末には出現しない点とで全く一致するのである。よって、当資料におけるチ表記・ツ表記も、入声音の促音化を示すものと思われるのであるが、この点を明らかにするために、先と同様に唇内入声・喉内入声の他の仮名表記との関係を見れば、表IV・表Vの通りである。

表IV —— a唇内入声 ——

ウ	フ	ツ	チ	表記 下接
	4	82	8	カ行
	1	46	26	サ
		1	2	タ
			24	ハ
	2			ガ
	6			ザ
	7			ダ
	1			バ
	2			ア
	1			ナ
	2			マ
				ヤ
				ラ
	1			ワ
	30			語末
0	57	129	60	計

表V —— b喉内入声 ——

キ	ク	ツ	チ	表記 下接
		68	28	カ行
	6			サ
	2			タ
	3	6		ハ
	23			ガ
	11			ザ
	27			ダ
				バ
	3			ア
	14			ナ
	4			マ
	7			ヤ
1	3			ラ
	1			ワ
12	349			語末
13	453	74	28	計

この表IV・表Vからは、「チ・ツ」と「フ」の表記、「チ・ツ」と「ク・キ」の表記との間に、それぞれ表II・表IIIと同様の相補分布が看取され、チ表記・ツ表記が、入声音の促音化を示していることが確認されるのである。ところで、当資料は、チ表記の外にツ表記が存する点で、龍門文庫蔵『阿弥陀經』『観無量寿經』と異なっているので

あつたが、これは、先の舌内入声音の表記と深く関連しているのである。

すなわち、『大般若波羅蜜多經』建長六年頃点の舌内入声の表記は、チ表記主体の中に、舌内入声に先行する母音が[u]の場合にツ表記を採るものであつた。今、当資料の促音化した唇内・喉内入声字を、促音の直前の母音によつて分類するならば、以下の如くである。

[o][e][a] 雜・各・亦・若・劇
 十・及・入・集・習
 (ナシ)
 [i] 業・法・獨・欲・得・極・北
 (ナシ)

直前の母音が[a][i]の時は、チ表記であり、[o]の時は、ツ表記であつて、チ表記かツ表記かは、入声音の直前の母音によつて決定されているのである。この点、舌内入声音の表記と同然である。このことから、当時、舌内入声音||促音という把握のもとに、上下の字が接することによつて生じる促音を、上字の末音として扱えていたことが知られる。このような認識のもとで加點されたことは、龍門文庫蔵『阿弥陀經』『觀無量壽經』も全く同様であるが、龍門文庫蔵本では、舌内入声のツ表記は、先行母音[u]の場合に限つて見られたため(例外:「發」へ一例)、母音[u]に続く促音化例の存しない本資料では、チ表記しか現われなかつたと考えられるのである。

四、むすび

本稿で取り上げた龍門文庫蔵『浄土三部經』は、これまでの記述から明らかな通り、呉音直読資料である。鎌倉後期

の書写ではあるが、その親本は、鎌倉初期頃の成立であろうと推定された。はじめに記した如く、『浄土三部経』の字音直読資料は、鎌倉時代以降見られるようになる。よって、龍門文庫蔵本は、本経の音読史を考える場合の基点となるべき史料なのである。また、その字音注の系統は、法相宗系統であることも推測された。管見の範囲では、鎌倉時代の法相宗関係の字音直読資料で仮名音注を有するものは少なく、この点でも貴重な資料となろう。

本資料は、今回の考察を踏まえ、さらに多角的な分析を加えなければならぬ資料であると思われるのである。

注

- (1) 石田茂作『寫經より 奈良朝仏教の研究』(東洋文庫論叢 第十一) 166ページ参照。
- (2) 中田祝夫『改訂版古點本の國語學的研究 総論篇』九一・四六六頁参照。
- (3) 『親鸞聖人真蹟集成 第七卷』(法蔵館) による。
- (4) 片岡義道『仁和寺本阿彌陀經について——聲點と聲明博士との連關』(慈覺大師研究) 所収) による。
- (5) 卷上の一部のみ。『恵信尼文書の研究』『恵信尼文書の考究』「墨美」297号による。
- (6) 小林芳規『角筆文獻の國語學的研究 研究篇』八五四頁による。
- (7) 藤堂祐範『浄土教版の研究』、片岡了『佛説阿彌陀經』(延書本)の國語史的研究』(神田喜一郎博士追悼中国學論集) 所収。川瀬一馬『續日本書誌學之研究』七八一頁、などを参照。
- (8) 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』八七頁参照。
- (9) 『伝後伏見院宸翰仮名書き親無量壽經・阿彌陀經』(勉誠社文庫47)の「解説」参照。
- (10) 藤堂祐範『浄土教版の研究』六二頁参照。ただし、本書中に龍門文庫蔵本は、取り上げられていない。
- (11) 『奈良市史 建築篇』(昭和51年5月) 273ページ参照。
- (12) 『阿彌陀經』と『無量壽經』との冒頭は、それぞれ「龍門文庫善本書目」(昭和57年3月) 210ページ・『日本書誌學之研究』二八四頁に写真版が掲載されている。
- (13) 奈良時代において『無量壽經』は、「學的研究の対象」であつたらしく(石田茂作『寫經より 奈良朝佛敎の研究』一六七頁)、

書写読誦は一般には行なわれなかつたようである(井上光貞『日本浄土教成立史の研究』48ページ)。平安時代においても同様であつたらしく、『寧楽遺文』『平安遺文』を通して、『無量寿経』の名は一度しか見られない。鎌倉時代の『浄土三部経』音読資料のうち、親鸞の『観無量寿経』『阿弥陀経』も、書写当初から『無量寿経』を欠いていたと説かれており、伝後伏見院宸翰『仮名書き観無量寿経・阿弥陀経』に、『無量寿経』が伝わらないのも偶然のことではないかも知れない。

(14) ()内のA・B・C・Dは、それぞれ『阿弥陀経』・『観無量寿経』・『無量寿経』巻上・『無量寿経』巻下を指し、算用数字は用例所在の行数を示す。以下同。

(15) 「幢」「成」二字の他の箇所での声点加点例は、去声濁あるいは直前の字の声調の影響による上声濁である。

(16) 「糊」は、本資料中に他例を見ないが、『法華経单字』では上声点が加点されている。

(17) ウ↓ク・名(B144)樓(B20)終(B321)ク↓ウ・徳(A89)閃(B65)ク↓ソ・目(B328)コ↓ヨ・國(B283)

後(B313)チ↓ウ・弗(A90)フ↓ア・部(B283)ロ↓ロ・品(B334)ユ↓ヤ・終(B321)ヨ↓ユ・諸(A8)リ

↓ソ・利(B25)。以上。

(18) 毘富羅声…此三種業(B69)フ入声…及富樓那(B18)。左に傍線を引いた字に、それぞれの声点が加点されている。

(19) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第一部第三章第一節。

(20) このうち、①⑤⑥⑩⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺について、写真等に依つても見ることができておらず、沼本博士の記述に負うている。

(21) 注(19)に同じ。

(22) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版。昭和61年6月。)261ページ。拙稿「呉音一音節去声字の上声化の過程」(鎌倉時代語研究 第十輯)〈武蔵野書院。昭和62年5月。〉所収)参照。

(23) 小林芳規先生よりお借りした移点本に依る。

(24) この際同一となった音韻は、通説の/je/とするよりは、/e/の方が漢字音の原音とはより良く対応する。

(25) 注(19)著書七二四頁に、『蒙求』読誦音について、同様の事象が指摘されている。

(26) 「於」については、多数の表記例全例がオであり、字母意識のようなものが働いていたことが考えられる。

- (27) 築島裕『平安時代語新論』（東京大学出版会。昭和44年6月。）三五八頁参照。
- (28) 尚、ウオウヲの表記が存しない理由については、完全にuo/oの発音に統合されていた為、ウを書き添える必要がなかったという考え方もできるが、全く合口性を失い、/o/に統一されていたと考える余地も有ろう。
- (29) 注(19) 著書七二四頁参照。
- (30) 注(6) 著書七四八〜七五二頁参照。
- (31) 小林芳規「中世片假名文の國語史的研究」(広島大学文学部紀要特集号3)昭和46年3月)七七頁参照。
- (32) 馬淵和夫『国語音韻史』(笠間書院。昭和46年4月。)118ページ。及び注(19) 著書七五〇頁参照。
- (33) 注(22) 著書169ページ参照。
- (34) 同右著書242ページ参照。
- (35) 林史典「吳音系字音における舌内入声音のかな表記について」(『國語学』第122集)
- (36) 吉沢義則「教行信証の訓点は坂東語か」(『龍谷大学論叢』大正12年4月)。小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』昭和40年9月)
- (37) 院政末期の聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華経』では、ツ表記が圧倒的に多く、鎌倉時代の「仮名書き法華経」でもツ表記が多数を占めるため、宗派による表記法の相違が存したものかも知れない。
- (38) 川瀬一馬「大東急記念文庫貴重書解題佛書之部」(昭和31年10月。)72ページ。
- (39) 注(19) 著書、付論第二章参照。
- (40) 尚、字音直読資料における促音の仮名表記は、「院政・鎌倉初中期では、まだ「ツ」「チ」表記の例は殆ど見出せないようである。」(注(19) 著書一〇八四頁)と言われる中で、本資料は、鎌倉時代における舌内入声⇓促音という把握を示す好資料として位置づけられるのである。
- (付記) 本稿は平成元年年度鎌倉時代語研究集会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上、小林芳規先生・沼本克明先生より有益な御示唆を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。